

蕾の悦虐（ロリマゾ）第1話

淫乱処女の エロエロ・デビュー

痴漢誘い受け
相撲部紅一点
女子集団虐め
下級生甘百合
リアル萌え米

ふんどしは
処女のたしなみ



濠門長恭

登場人物

野原知子

マゾ願望を自覚している処女。露出過剰な服装で電車に乗って痴漢初体験するが、それを上級生に目撃されて騒ぎになって、田舎の（全校生徒が一学級分くらいしかいない）学校に隔離される。

森篤夫

体育教師（用務員代理を兼務）。相撲部を創って、そのうちのひとりをマゾ奴隷にしているショタコンでロリコンのサディスト。知子を強制的に相撲部へ入部させて「可愛がる」。

蒲田和夫

村を牛耳っている建設会社社長。若いジャパユキさんを後妻という名目でマゾ牝奴隷として飼っている。

鈴木夏海

下級生。よそ者に集団レイプされかけたところを身代わりになって助けてくれた知子

に百合心を抱く。夏休みには知子の手ほどきでエッチな遊びを覚える。最後まで処女。

水無川太

森篤夫のショタマゾ奴隷。女子を焚きつけて、凄まじい性的虐めを知子に加える。

目次

1. 痴漢デビュー..... - 5 -
2. ふんどしデビュー..... - 22 -
3. 部活デビュー..... - 50 -
4. 三穴デビュー
5. リンチデビュー
6. 輪姦デビュー
7. 百合デビュー
8. 野外デビュー
9. 米ドルデビュー

後書き

1. 痴漢デビュー

あたし、野原知子。●学2年生。

身長155センチ、体重47キログラム。

スリーサイズは82（B）／61／84。

ちよいボーイッシュなショートで、クラスメートからは（言動も含めて）漢^{おとこ}だって言われてる——なんてしょうもないことを考えるのは、ショーツを濡らさないため。

だって。隣の大学生ぽいお兄さんは、一度乗った電車から降りて、あたしの横へ並んだ。後ろのスーツ着た小父さんは、ずっと向こうのほうから列をかき分けてやって来たし。斜め後ろのダッフルコートを着たお兄さんも、タッチの差を競うようにして割り込んできた。怪しい人たちに囲まれてるのも気づかずに、モダンなポストってどんなんだろう——なんて、これから行く美術館の催しのことで頭が一杯。あたしは隣の女性専用車両の列に並んでると、根本的に勘違いしてる。

だから、乳首が勃って胸ポチしてるのは寒さのせい。Gジャンの下はTシャツだけ。先

着五十名様にオリジナル・ポストカード進呈なものだから、あわてたせいでブラジャーも着け忘れてる。トップスがGジャンなら、とうぜんボトムスはGスカ。ミニじゃないと野暮ったいよね。美術館なんてハイソなところへ行くんだから、気合を入れてお洒落したけど、二月ってのはねえ。

あ。平日の通勤時間帯に私服で電車に乗ってるのは、サボじゃないよ。今日は学校の創立記念日。

といった具合に。あたしの行動は、ちゃんと筋がとおってる。痴漢を期待してたりなんかは、絶対にしてない。

区間快速が来て。ドアが開いても降りる人はほとんどいない。ずどどどどって感じで、一気に車椅子のスペースまで押し込まれた。

今日はスニーカーとかじゃなくて、手持ちアイテムの中では、いちばんお洒落な厚底のハーフブーツ。だから、あたしのお尻は男の人の手の高さに来ていて。電車が動き出す前から、手の甲が当たってる。いつもなら反射的に逃げるのだけど……身動きできないほど混んでる電車は初めて。仕方がないので、じ

っと我慢。してるだけで、もう心臓がバクバクしてる。

やめよかな？ ふっと弱気になる。でも、絶対あとで後悔するってわかってる。痴漢されて、ぜんぜん期待どおりじゃなくて、それがトラウマに……わわ、今の取消し。あたしは、痴漢されたいなんて思っていない。うっかり間違えて女性専用車両の隣に乗ってしまって、たまたま狙われやすい服装をしていたせいで被害に遭ってしまう、かわいそうな女の子なんだから。ふう。自分をだますのってむずかしいよね。

電車が揺れたはずみで、お尻に当たってた手の甲がずれて、裏返って戻ってきた！ ぞくっと背筋に鳥肌。手の甲と手の平とじゃ、まるで感覚が違う。ぴたっとお尻に張り付いてくる。

電車の中で男の人の手が身体に触れるのは、よくあること。でも、逃げないのは、これが初めて。そう意識すると膝が震えてきて、ほんとうに身体が動かせなくなった。窓の下についている手摺に両手でつかまって、気を落ち着かせようとして深呼吸。

そうこうしてるうちに、手の平がもぞもぞと動き始めた。お尻の丸みを撫でて、ひぐっ……割れ目を指でなぞってる。あたしが逃げないし声も出さないの、本格的に痴漢するつもりになったんだ。お尻の谷間を撫で下ろした指が、すっと裾をめくった。前屈して手を床につける姿勢になるとショーツが見えるくらいのミニだから、ほかの乗客にはめくられているのがわからないかも。

びくん！ 腰が大きく跳ねてしまった。だって——いきなりショーツの中に手を入れられた。肌をじかに撫でられてる。そこに意識が集中して、火傷しそうなくらい熱い。

きゃ……！ あたしは反射的に上体をひねろうとして、男の人の胸に顔をぶつけかけた。ダッフルコートの裏地が目の前にある。この人、コートをはだけた感じにして広げて、あたしの身体を乗客の視線から隠している。てことは、連携プレー。それも、二人ではなくて三人。だって、手摺にしがみついている腕をいかくぐってあたしの胸を（撫でるとか揉むとかじゃなくて）つかんでる手は、ダッフルコートとは違ってセーター。列の隣に並んで

た大学生ぽいお兄さん。男の人の大きな手の中に、あたしの（コンプレックスってほどじゃないけど）小ぶりなおっぱいがすっぽりおさまってる。

「痛い……」

おっぱいの付根を圧迫されて声が出てしまった。はっと、その声を飲み込んでしまったのが致命傷だった。あたしは電車のかどっこに押し込まれて、三人に取り囲まれてしまった。肩から膝の裏側まで、男の人たちの身体が密着してくる。何をされても抵抗しないと見きわめられたんだろう。

あ！ そんなところまでは、まだ心の準備が……スカートの上からと同じ手順で、指がお尻の割れ目をなぞって。そこで止まらずにアヌスを突つつく。

「……………」

Tシャツの裾がたくし上げられた。お腹をすうっと撫で上げられて、おっぱいもじかにつかまれた。

やばいよ、これ。三人はがっちりあたしを取り囲んでるけど、隣の女性専用車両との間はガラス。つぎの駅で降りる●校生のお姉さ

んたちが……こっちなんか見てなかった。単語帳か教科書かスマホ。とにかく視線は下を向いてる。それでも、ふと目を上げることだってあるだろうから。あたしは無理やりに身体をひねった。背中がGジャンで隠れてる。のだけど。自分から痴漢さんたちに向き合う形になってしまった。

背中に密着してたスーツの小父さんはお尻から手をはなして。ふふんと嗤ったのかな。それとも興奮の鼻息？ 堂々と正面からスカートをまくってきた。そして……やだ、それってやり過ぎだよ。ショーツを太腿まで引き下げられた。

「や……」

ほかの人に聞こえないよう、小さな声で拒んだけど。指で割れ目をなぞられて、腰が砕けた。けれど、あたしは立ったまま。壁に押し付けられてるだけじゃなくて、大学生のお兄さんがあたしの腋の下へ片腕を突っ込んで支えてくれてる。というか、逃がさないようにしてる。

割れ目をなぞってた指が、ちょっとだけ花びらの内側をえぐってから。太腿の付根のく

びれた部分をこすった。ぬるっとした感触。痴漢さんの指、あたしのエッチな汁で濡れる。あまりの急展開に驚きっぱなしで気づかなかったんだけど、濡らしてるのを自覚してしまうと、恥ずかしさで顔が熱くなった。

「はあ……」

あたしは大きく息を吐いた。そこをさわられたときから、ずっと息を止めてたみたい。

「はあ……んん」

息を吸って吐くだけなのに、小さな声が出てしまう。電車の騒音で、痴漢さんたち以外の人には聞こえていないだろうけど。

これはあたしの名誉のために断言しとくけど。あたしはけっして感じてなんかいない。もぎゅもぎゅとこねくられてるおっぱいは痛いだけだし、割れ目を撫でられても悪寒がするだけ。痴漢されてるってシチュエーションに興奮してないっていうと嘘になるけど、それだって恐怖が半分以上。もちろん、このまま犯されるんじゃないかとか、そういう恐怖はない。電車の中でメロメロにされてトイレへ連れ込まれるなんて、そんなエロコミックな展開は起こりっこない。だから恐怖といっ

ても、ジェットコースターのスリルを愉しめるようなところがあるのかもしれない。ジェットコースターだって、大事故を起こすことはあるけど。

「あんっ……」

クリトリスを指の腹で転がされて、さすがに快感が走ってしまった。そこを虐められ続けたら前言撤回しなくちゃいけない——はずだったのだけれど。

「ちょっと、あなたたち！ なにをしているの！」

女の人的大声と同時に。男の人が、あたしを取り囲んでいる三人をひっぺがしにかかった。

「痴漢取締中の警察官です。あなたたちを現行犯で逮捕します」

すうっと全身が冷たくなった。とにかくショーツを引き上げてTシャツを引き下げて。

うう、まずいよ。あたしが抵抗しなかったのは、恐怖に怯えていたからだけど。声を出さなかったのは、恥ずかしかったからだけど。なんで、正面を向いちゃったのかな。お股を濡らしていたのも説明がつかないよ。

それに、この格好。家を出たときはTシャツの上にセーターを着てGパンだった。それは今、コインロッカーの中。わざわざ痴漢に狙われやすい服装に着替えた理由が説明できない。

「あたし、なにもされてません！」

これで押し通すしかない。

「恥ずかしい気持ちはわかるわよ」

婦警さん、猫撫で声。

「でも、この人たちを捕まえないと、あなたと同じ被害を受ける子が増えるのよ」

「だから、なにも被害は受けてません！」

我ながらヒステリックに言い返して、はっと気づいた。電車の中で、あたしたちは注目の的。この車両の中だけじゃなくて、隣の女性専用車両の人たちも、こっちを見ている。

「あなたのプライバシーは完全に守られるのだから。勇気を出してちょうだいね」

言い争っても、正論は婦警さんのほうにある。あたしは無言で小さくうなずいた。さいわい、電車はつぎの駅に近づいている。ドアが開いたら、とにかく走って逃げよう。それしか考えていない。

そうして、好奇心の目に晒されながら数分——のはずだけど。痴漢されてた時間の何倍にも感じられた。

電車が止まって。あたしを助けてくれた男の人（私服の刑事さん？）が、痴漢さんたちを電車から引きずり出すように降ろして。後ろで見張ってる感じで婦警さんが、あたしの手を握って——その手を振り切って、あたしはホームを駆け出した。まっすぐ改札へ向かって、切符を探してるうちに追いつかれるかもしれないと、とっさに判断して。階段を駆け上がって反対側のホームへ向かった。

人混みに紛れて改札口を出て。後ろを振り返ったら、誰も追いかけて来ない。停まったバスに行き先もたしかめずに乗って、ポストモダニズムなんか最初からどうでもよかったから、適当に降りて時間をつぶして。まさかとは思うけど駅で婦警さんとか張り込んでるかもなので、快速電車で一駅の距離をバスで乗り継いで、乗車駅で着替えてから帰宅。

あたしのささやかな大冒険は、ハプニングはあったけど目的は達したから、ノーマル・エンドかな。

——ところが、バッド・エンドだった。

翌朝。いつも一緒に登校してる詩乃ちゃんが、いきなり。

「トモ、痴漢をかばったんだって？」

トラ・トラ・トラ！ 想定外の奇襲攻撃。

「え……！？」

絶句するしかない。

「女性専用車両の隣に超ミニスカで乗って、痴漢を挑発したって噂になってるよ」

「赤組の副団長だった沼田さんが、ずっと見てたって」

「ノーブラで生揉みされて、あへってたって？」

うああああああ……知人がいないか冷静に観察してたつもりだったけど、やっぱりお留守になってたんだ。ていうか、3年生の顔まで覚えてないよ。

やばい、破滅だ。あたしは親が許してくれないけど、クラスの半分以上はスマホかガラケーを持ってる。あたしの知らないうちに、ひと晩で、噂は学校中に広まっちゃったんだ。

ええと。初デートだから気合が——駄目。そのBFを紹介してよって流れになるかも。

親や先生からは、フジュンイセイコウユウとかなんとかお説教されるかも。

いつものGパンで美術館へ行くのは格好悪——いと断言する根拠レス。

ちょっとお洒落したつもりだったけど、ふだんはラフな格好ばかりだったのでTPOが失敗——てのは、あたらしいけど。ホームに並んでるときから男の人に囲まれてて、女性専用車両と間違えるかなあ？

たっぷり十秒は時間が止まったた。

ええい。ぎりぎりの真実を隠すには、ぎりぎりまでほんとの事実を暴露しなくちゃ。なにかの本で読んだうろ覚えだけど、ヒトラーさんだっけ、アベさんだっけ？

「シイちゃんだって、映画館で痴漢されたって嬉しそうに話してたじゃない。ユンはコンサートでハグされたときお尻を撫でられたし、ルイっぺは女性専用車両でレズ痴漢でしょ。あたしだけ痴漢未体験で、女として出遅れてるから……でも、下着の中まで手を入れられるとは思ってなかったよ」

詩乃ちゃん、呆然絶句。そして、溜め息。

「……やっぱ、トモって漢おとこだねえ。奥手のく

せして、思いきったことするんだから。ていうか、奥手だから怖いもの知らずみたいなの？」

これにて一件落着。するはずもなくで。

友達がみんな痴漢被害に遭ってるのに自分だけが取り残された悔しさってのは、いちおう皆様の御理解を賜ったんだけど。

まず、先生からお説教。パパとママからもお説教。ずうっと昔、五歳のときだったかな。スーパーでグミとか勝手に食べちゃったとき、それは泥棒だってパパにビンタされた記憶がある。今度も覚悟はしてたんだけど、それはなかった。あ、体罰希望のマゾじゃないよ。痛いのはやだもん。

オトナのお説教なんて（たとえビンタ込みでも）、しおらしく拝聴しといて、ここぞってタイミングで涙を流せば赦してもらえるんだけど。

問題は学校の中。

生徒会の書記をしてる3年の女子に呼び出されて。立入禁止の屋上へ向かうあたりで、リンチとか頭をかすめたんだけど、まさかという思いが半分と、あまり痛いのはいやだけどなあという期待（？）が半分と。

結論からいうと痛くはなかったけれど。3年生の男子が四人も待ちかまえていた。

「痴漢を誘惑なんかして、学校名がネットに出たら、あなたひとりの問題じゃなくなるのよ」

「痴漢志望だったら電車なんか乗らなくて、おれたちに相談しろよ」

いきなりあたしを羽交い絞めにして胸揉み。スカートをまくって土手揉み。

「たすけ……むぐう」

口を手でふさがれて、あたしは軽くパニックだった。痴漢さんのときとは違う。まわりには助けてくれる人がいないし、つぎの駅に到着することもない。犯される危険があった。のに……濡れてきたなんていわないけど、腰の奥がふにゃっとなってしまう。無抵抗で、され放題。だったのは数分かな。

「ごるあ！」

大声が轟いて、あたしは解放された。英語の小島先生だった。弱小野球部の監督をして、屋上に人影が見えたので様子を見に来たんだそうだ。

ふつうなら五人が処分されるんだけど、あ

たしがまた挑発したんじゃないかとか、教師のあいだでも問題になったと人づてに聞かされた。書記の子がヒンコーホーセイでセイセキ्यूシューだったのも関係してるかも。あたし本人には事情をたしかめないまま、精神的に落ち着くまで自宅静養ということになった。

困り果てたのがパパとママ。冷却期間を置いて、たとえば来学期から登校したとしても、また同じことが起きない保証はない。そもそも、痴漢被害に遭いたいなんて考えを持ったのも、性情報が氾濫している世相が悪い環境が良くない。ということで、進学先は予定を変更して全寮制の女子校にされた。

でも、それは一年以上も先の話。それまでどうするか——も、紆余曲折があったかどうか知らないけど、パパのお父さんのお兄さん（あたしから見ると大伯父だっけ？）に預けられることに決まった。あたしの人生なのに、あたしの意思は無視。

島流しの刑を言い渡されて、あたしは意気消沈、絶望のどん底。ネットで調べてみたら、ADSLさえつながらない。どんだけ田舎な

んだよ。

ところが……転校先の学校については、気になる情報も引っ掛かった。まだブルマが生き残ってるとか、いまだに身体測定は下着姿とか。人口が少ないので校区が広くて、山道で暴漢に襲われる事案（すごい無味乾燥な表現だね）が稀に起きているとか。学校の男子に襲われただけでパニックだったというのに、暴漢に襲われる自分を妄想してショーツに染みを作っちゃうんだから、あたしって、ほんとうにいけない子だ。

そして。事前の顔合わせってことで、両親と一緒にその村へ行ってみて。たしか四年ぶりだったかな。お爺ちゃん（と、あたしは呼んでいる）は、まったく変わってなかったけど、お婆ちゃんは別人みたくなっていた。認知症ってやつ？ あたしたちのことを覚えていなかったし、話しかけても聞いてない。

「耳が遠くなったり、物忘れがひどくなるのは歳だから仕方がない。家事も野良仕事も、まだまだ人並みにできとる」

と、お爺ちゃんはパパとママの心配を否定した。たしかに、家の中はきちんと片付いて

るし、手作りのお団子はすごくおいしかった。

そういうわけで、あたしの島流しが決まったのだった。

2. ふんどしデビュー

ほんとうに、やるの？

洗面所の鏡に映ってる全裸の自分に問いかけてみる。

お爺ちゃんとお婆ちゃんは、朝の畑仕事。あたしんちの三倍くらい広い家の中で、今はあたしひとり。

やるもなにも——鏡に映ってる女の子の股間は、つるつる。夕べ遅くにワックス脱毛したんだ。ここまでやっというて、やっぱりやめるなんて、それはない。旅の恥は掻き捨てっていうけど、これから一年間の出来事は、遠い都会の女子校にまでは伝わらないよね？

あたしは、脱衣カゴのいちばん上に重ねてる白い布を手を取った。半幅の晒木綿を三メートルの長さに切ってある。端から六十センチくらいのところに結び玉を作った。輪の中に何回も布をくぐらせてから力いっぱい引き絞ると、ピンポン球を縦にふたつ並べたみたいになった。ちょいガニ股になって左手で股間を小淫唇ごとくぱあして、結び玉を埋め

込んで。布を細く絞って後ろへ引き上げて、尾底骨の上で横へ折り返してウエストを一周。折り返したところに絡めて反対側へ引き絞って、余った端はウエストの布によじりつけていく。

やっぱり、脱毛しといて正解。ぎゅうっと締めても、毛が巻き込まれない。

うん——ふんどしを締めるのは、これが初めてじゃないよ。ただ、ふんどしのまま外出した経験は一度だけ。近くのコンビニへ行ってレディコミ買って来て、それだけで大洪水。なのに、ふんどしを締めて学校へ行こうなんて無謀もいいところ。ちょっとだけ緩めよう。

ふんどしの締め方は二通りある。顎で押さえている布の端を、そのまま前へ垂らすか、もう一度股間をくぐらすか。あたしは、くぐらす派。今度は布を広げて股間を包んで、そのまま後ろへ——引き上げないんだよね。きっちりポイントを探って、小さな結び玉を作って、こいつをアヌスに埋めちゃう。で、さっきとは反対側から後ろの折り返し部分に絡めて、きゅっと（軽めに）引き絞ってからウエストによじりつけて出来上がり。

気をつけ、休め。おっぱいを下から持ち上げて（うう……貧乳には無駄な努力じゃ）セクシーポーズ。なんてしてる場合じゃない。学校まで歩いて登って40分。のはずだけど。すたすた歩ける装備じゃないから。1時間前には家を出なくちゃ。

あたしはふんどしいっちょう（一本ていうのかな）で自分の部屋へ戻った。そして、素肌の上にセーラー服を着る。ブラウスもブラジャーも着けない。

どこの学校でも同じだけど、入学のときに作った制服を三年間通して着るから、学年が上がる（背が伸びる）につれてスカート丈は自然と短くなってく。今度の学校の制服を作るとき、あたしは前の学校の制服を持ってって、それより少し短い丈にしてもらった。付き添ってくれたのはお婆ちゃんだったから、今時はこれくらいがふつうだよでごまかせた。ので、自然と膝上15センチになる。三月に来たとき見かけた子たちより、ちょい短いかな。なにかいわれたら、都会じゃこれくらいがふつうですって押し通す。

さあ、新生活のスタート！ 気負って歩き

始めて。くうう……一歩ごとに結び玉が股間を突き上げてくる。柔らかい木綿でも幅があるから腿の付け根に擦れて、それやこれやで処女喪失の翌朝みたいな歩き方になってくる。あ、これはレディコミの知識。あたしは指（一本だけだよ！）より太い異物をヴァギナに挿入した経験はない。

あまり股間を刺激しないよう、歩幅を小さくしてゆっくりと。それでも、奥のほうからじんわりとろりと濡れてくる。すこしくらいなら結び玉が吸収してくれる——ていうか、結び玉のせいで濡れちゃうんだけど。上の布まで染み出さないように、気をつけてもどうにもならないから、お祈りするだけ。

アヌスの結び玉は初めての挑戦だったけど、異物感が半端なくてすこしだけ苦痛もあるのに。ますます濡れてくる。

それに、もどかしい。コンビニへ行ったときは、家に帰って即行オナニーできたけど、今日はこの刺激に午後まで耐えなくちゃならない。蛇の生殺しだよ。

もどかしいだけじゃなくて、うざい。この辺の人たち、誰も歩きスマホしてない。そし

て村落共同体の感覚が濃厚。つまり、すれ違うときには必ず挨拶。

「おはよう」

「おはようございます」

「あんた、見ない顔だね。もしかして、野原さんどこへ留学に来た娘さん？」

「はい、そうです」

「コンビニもゲームセンターもないけど、自然だけはたっぷりあるからね。それじゃ、元氣で行っておいで」

「はあい」

まあ、気が紛れて一時的にでも乾いてくるんだけど。それでも。土が剥き出しの道路を延々と歩いて、学校に続く山道を上がり始めた頃は、なんだか雲の上を歩いてるみたいな感覚になって。誰、この人？ みたいな視線を浴びながら何人にも追い抜かれた。よそ者を受け入れるかどうか値踏みしてるのか、ちゃんと紹介されるまでは口を利いちゃいけないとでも思ってるのか。みんな無言。あたしも警戒心が起きてきて。おかげで、予鈴の5分前には学校に到着。教員室へ行って。

「今日からお世話になる野原知子です」

はきはきと挨拶。教頭先生と体育の男先生とは、お婆ちゃんと一緒に来たときに会っている。あとは、知らない顔ばかり。

すぐに始業式。全校生徒の前で、転校生の紹介と本人の挨拶。全校生徒たった、あたしを入れて37人。ホームルームを格式張らせたみたいな印象。来週には入学式があるけど、それでも60人くらいにしかない。

古い木造の校舎は、もっと村の人口が多かった頃の名残で、ふつう教室だけで十個。各学年がひとつおきに使ってる。3年生は玄関にいちばん近い教室。いったんそこで臨時の席決めをして。また挨拶をして。すぐに女子だけが保健室へ移動。この学校は、始業式(新入生は入学式)の日は身体検査。それは新入生向けのパンフレットにも、ちゃんと書いてある。

『Tシャツ等の着用は原則禁止です』

あたしは、うっかり読み落としてた。だから、2年生と3年生とが一緒になって、わいわいきゃあきゃあとセーラー服を脱ぎ始めたとき、ぽかんとしてる。

「野原さんだったわね。どうしたの？」

保健室の豊田智草先生に声をかけられて。
「あの……あたし、えと……ブラをしてなくて」

「あら……ふだんは着けてなくても、今日は着けてくるように書いてあったでしょ？」

あたしがもじもじしてると、パンと机を叩いて。

「仕方がないわね。ショーツだけで身体測定を受けなさい」

有無を言わせぬって感じ。

あたしは観念して上衣を脱いだ。

「きゃ……」

「なに……？ ブラウス着てないの？」

あたしは、きょとんとしてる。なんでほかの子がざわついてるのかわからない。だって、都会じゃこういう着こなしがふつうだから。そして、平然と（のわりには指が震えてたんだけど）スカートを落とすと。

「やだあ……！」

「Tバックなんて」

「あれ、フレンドシじゃないの？」

狭い保健室に15名の女の子の黄色い声が沸騰。

「野原さん。それは……なんの真似なの？」

ノーブラには平然としてた智草先生も、目を丸くしてる。ていうか、詰問口調。ここでどう振る舞うかで、あたしの一年間は決まる。頑張れ、^{おとこ}漢知子。

「ふんどしって、けっこう流行ってますよ。レディース専門の通販ショップもあります」
ざわめきが治まって。しいんと静まり返る保健室。先生の顔が引きつってる。

「たとえそうだとしても……学校へはふつうの下着で来なさい」

「これ、護身対策なんです」

なんで先生が怒っているのかわからない。「だって……女子生徒が下校中に暴漢に襲われる事案が去年もあったんでしょ？ ふんどしだとショーツと違って、簡単には脱がされないから。暴漢がもたついてるうちに、隙を見て逃げ出すとか反撃するとか……貞操帯も考えたんですけど、それは不便そうだし」

先生は真正面からあたしの目をにらみつけてる。あたしは天真爛漫純真無垢に視線を受け止めて。負けたのは先生。ほうっと大きな溜め息をついて。

「わかりました。あなたなりに考えた上での服装なら咎めはしません。こんな突拍子もない例まで校則では想定していませんから」

ということで。身体測定はとどこおりなく終わった。あたしの身長は1センチ伸びてて156、体重も増えて48キロ。なのに、スリーサイズが同じだったのは不満。

女子が終わると男子。そのあいだは教室にこもって自習。ふつうだったら。最初は転校生を遠巻きにして、それから積極的な子が話しかけてきて――なのだろうけど。あたしの場合には遠巻きのまま。ていうか、異星人を眺めるみたいな、好奇心いっぱいだけど恐くて近寄れないみたいな視線が、漫画のフラッシュ線みたく集中してる。てのは、自意識過剰かな。あたしもさすがに、なにかまずいことをしたんじゃないかと気づきかけてる演技で、ずっとうつむいてる。

そのあとのホームルームは何事もなかったかのように議事進行して、転校生のあたしは無役。放課後に教員室とか指導室へ呼ばれることもなかった。

下校のときは、もうふんどしを濡らしても

平気だから、ずんずん歩いて。途中から、坂道を下りてるんだか上ってるんだかもあやふやになって、30分で帰宅。お爺ちゃんたちも家にいたので、鍵の掛からない自分の部屋で気配を気にしながらぱっとふんどしをはずして、ショーツとブラとシャツを着てから、前の学校のジャージに着替えて。欲求不満に身体を火照らせながらお風呂を掃除したり夕飯の支度を手伝ったり。午後9時ちょうどにふたりが寝るのを待ってお風呂へは行って。オナニーでいきまくった。

そうして、あたしも10時半には布団には行って。やり過ぎちゃったかな。一年間、このキャラを維持するのも疲れるかな。反省と不安とが、いつまでも眠りを妨げて。

それなのに、翌朝は。ふんどしだけならじゅうぶんに登下校できるとわかったので。限界に挑戦しちゃうんだから、ほんとにいけない子だ。今朝は通学中にいけちゃうかも。

きれいに洗ったシャンプーのポンプを用意して。来る直前に和装店で買った晒木綿とは違って、半年前から愛用してるやつ。直径一

センチ半くらいの小さな輪ゴムを二重にして、うんと引き伸ばして吸い込み口にかぶせるので、すっかり充血しちゃってる乳首をポンプの口に吸わせておいて、輪ゴムを滑らせて。パチンと乳首の根元にゴムが噛みつく。

「く……」

その瞬間が、ちょっと痛い。けど、締め付けはそんなにきつくない。何時間着けてても血流が遮られて変色したりはしない。このままゲームとかしてて勃起が治まると、輪ゴムの存在を忘れることもある。

そうやって両方の乳首を軽く虐めておいて。同じ要領で、今度はクリちゃん。ポンプに吸わせるとき、左手の指で両側から挟んで皮を剥いておいて……パチン！

「い、痛い……」

ものすごい違和感というか刺激で、反射的に腰が引けてしまう。けど、輪ゴムはクリちゃんの根元に食い込んだまま。こっちは乳首と違って、輪ゴムが敏感な粘膜を剥き出しにしているので、小さくなっても強い刺激が続く。

敏感な突起を刺激したまま、あたしは新しいふんどしを締めた。昨日のは結び玉をほど

いて、下着と一緒に部屋の隅にまとめてある。学校から帰ったら洗わなくちゃ。お爺ちゃんは昔気質っていうか、家事にはノータッチ。目立たないように干しとけば気づかれないと思う。お婆ちゃんには、生理用の丁字帯（ネットで検索したんだ）とでも言っちゃうつもり。

登校中の刺激は、思ったよりも弱かった。乳首はざらついたセーラー服の生地に擦られて、快感よりは苦痛が強いから正気でいられる。剥いて絞り上げたクリちゃんは、ふんどしの生地が密着してるから、ちょっと刺激される程度。一步ごとにぐりんぐりんとえぐり上げてくる結び玉にばかり意識が集中してるせいもあるかな。それでも、山道へ折れる手前のバス停のベンチで五分ほど休憩しないと歩き続けられなかったくらいには感じてただけ。

山道を上り始めると、もう休めない。登校してくるみんなに追い抜かれるのは、田舎道に慣れてない都会のお嬢様（誰が？）だから仕方ないけど、腰掛ける場所もないし、道端にへたり込むのはかなりやばい。ので。結局

は雲の上を歩いて学校に到着。

異星人に浴びせられる視線をつねに意識しながら無事に三時限まで終わった。無事過ぎるよ。教室移動のときだって、ずっと背後の気配に神経を張っていたのに。スカートをめくってくる男子はいなかった。

さあ、四時限目が本日いちばんの試練。というのは、体育だから。

体操服に着替えるのは簡単だった。スカートを穿いたままふんどしをはずして(だって、ラインが浮かび上がるのは恥ずかしい)ブルマを直穿きして。セーラー服を脱いで体操服に着替えるのは秒速。だけど、ブルマからふんどしに戻すときは。スカートを先に穿いておくのは無理。思いきりパイパンを晒すことになる。

うん、脱毛しといたほうが衛生的だし。娘の誕生日に永久脱毛をプレゼントする両親だって、ヨーロッパでは珍しくないそうだよ。SMとかロリコンとか考えるほうが変態なんだよ。

登校で自信(?)をつけてたから余裕綽々で授業に出ただけ。準備体操を始めた瞬

間、これはやばいと直感した。

ぐうんと身体を反らしたとき、クリちゃんにピリッと電気が走った。前屈するとブルマの生地が肌からはなれて、身体を反らすと、また密着してクリちゃんを擦る。

「野原さん。もっと大きく身体を動かさない」

智草先生の鞭打つような声。この人は保健室の先生（養護教諭だっけ）だけど、体育授業の補助も務めてる。生徒数が少ないから先生も少ない。一教科に一人どころか、掛け持ちが多い。たとえば担任の奥村先生は、美術と音楽とか。

第一印象がきつかった智草先生に注意されて、あたしは動作をやけくそに大きくした。

「いーち、にい。さん、しい」

最初の『いーち』で背中を反らすと、きゅるるんって感じでブルマに擦られて、『にい』で圧迫。『さん』で上体を起こして、ふわっと圧迫がゆるみ、『しい』でクリちゃんが宙ぶらりん。三回四回と繰り返してるうちに熱い蜜が腰の奥から湧いて、花びらの間から垂れてくる。ブルマは紺色だから、染みても気づか

れないよね？

それから、足を前後に開いて屈伸運動。ふんどしをしてなくてよかった。してたら、膣口をゴリゴリ刺激されて昇天しちゃったと思う。あたし処女のくせに、指とか鉛筆とかで、膣性感てのを知ってるから。

準備体操は乗り切って。本番は男女合同で、運動場を十五週の持久走。なんだけど、田舎は土地が余ってるんだね。前の学校に比べて校庭がやたらと広い。あとで知ったんだけど、グラウンド一周が三百五十メートル。十五週で五キロちょい。それを男子は二十分、女子も二十五分以内で走れっていうんだから厳しい。股間を刺激しないようにとか気づかって走れるスピードじゃない。

乳首も痛気持ちいい。Bカップでもノーブラで走ればそれなりに揺れる。体操服の生地に乳首が擦れて、勃ってくるのと付根の輪ゴムがじわじわ締め付けてきて。乳首とクリちゃんの三点責め。

「知子、遅れてるぞ」

男子の先生は森篤夫っていうんだけど、この人、生徒の名前を男女とも呼び捨て。前の

学校ならPTAとか出てきて大変な騒ぎになるはずだけど、みんな平気な顔してる。うう、昭和テイストだよ。そのうち、バケツ持って廊下に立たされたりして。で、バケツには水がたっぷり身動きできないのをいいことに、男子がスカートをめくったりおっぱいを揉んだり……なんて妄想に耽ってる場合じゃない。

南無死（七六四）んだ恵美押勝の乱、いいくに（一一九二）つくろう鎌倉幕府、いざこれ（一三五〇）から観応の擾乱……男の人が射精を我慢するときに唱える呪文で、妄想を打ち消して。

だけど、物理的的刺激には勝てない。目一杯のストライドでピッチを上げてくと……まだ三週目なのに……駄目、大っきな波が、波が来ちゃう……！

腰からも膝からも力が抜けて、グラウンドにへたり込んだ。じゃった。

「どうしたの？」

「大丈夫か？」

「せんせーい、野原さんが！」

五六人があたしを取り囲んで、どうしていいかわからず、うろうろおろおろ。森先生と

智草先生とが、あたしの左右にしゃがみ込んで。

「貧血のようね。森先生、保健室まで運んでやってください」

智草先生はあたしの腋の下に手を突っ込んで、おっぱいごと上体を持ち上げるみたいにして、あたしを森先生におんぶさせた。森先生は、あたしのお尻をがっしりつかんで立ち上がる。あたしはまだ余韻を引きずってるから、身体を強く刺激されるたびに呻いてしまう。

保健室まで運ばれて。あたしをベッドへ寝かすと、森先生は授業へ戻っていった。智草先生は、本来のお仕事――から逸脱してると、すぐに気づいたんだけど。

「顔が赤いわね。それにすごい汗。身体を拭きましょう」

先生の手が体操服の裾をつかんだ。

「あ……大丈夫です。このままで、いいです」

「なに言ってるの。保健室へ来て風邪をひかれちゃ、わたしが困るのよ」

強引に脱がされた。あたしとしても、そうそう抵抗するのも不自然だから逆らわなかつ

ただのだけど。

「あら……！」

先生の視線は、あたしの乳首に釘付け。

「あたし……乳首が陥没気味なんです。だから、輪ゴムで絞り出して癖をつけようとしてるんです。鬱血とかしないよう気をつけてますから平気です」

説明過剰だったかな？

「ふうん？」

先生の目が細くなって、唇の端が片方だけ吊り上がった。見抜かれた——と、あたしは直感した。

「それはともかくとして、ブルマも脱ぎましょうね。クロッチのあたりがびしょ濡れになってるわよ」

あたしは反射的にブルマを押さえたけど。ひっぱたかれるみたいに手を払いのけられると、それ以上は逆らえなかった。というか。全裸を（パパとママも含めて）見られるなんて、何年もなかったことなので、変に興奮して。見られたいって衝動があたしの身体を硬直させていた。

つるんとブルマがお尻を抜けていって。

「あらあら……これは、どう説明するの？」

「きゃんっ……！」

充血した剥き出しのクリちゃんを指先で弾かれて、あたしはスピッツみたいな悲鳴をあげてしまった。

「野原さん、答えるのよ！」

サディスティックな命令口調——と思ってしまうのは、あたしのほうにスイッチがはいっちゃったからかな。

「あの……皮がかぶっていると垢が溜まって不潔になるので。それで……あの……」

「お髭もむさ苦しいから処理しちゃったのね？」

「……はい」

しまった。まだ生えてませんって言っとけばよかったのに。

「それじゃ、そういうことにしといてあげる」

唇の端が両方とも吊り上がって微笑の形になった。けれど、目はちっとも笑ってない。

「こんなに性器のケアに気を使ってるってことは——セックスの経験がありそうね」

「ないです！」

エッチな女の子だと思われても仕方ないけ

ど、ビッチだとは思われたくない。

「どうかしらね。調べれば、すぐにわかることよ？」

先生の両手が、あたしの膝にかかった。

「処女膜がちゃんとあるか検査します。これは生徒の健康管理に必要なことなのよ。脚の力を抜きなさい」

処女膜があるのは、自分でもわかってる。スポーツで破れたりにはしていない。だって、鉛筆をちょっと奥まで挿れてこねくると、すごく痛いから。

だから素直に足を開けばいいんだけど。秘部（単語だけで変な気分になっちゃうよ）を見られるんだから、すこしは処女の恥じらいを演出しなくちゃ。あたしは上体を起こして、手を振り払われるより先に先生の腕をつかんだ。

「強情な子ね……」

それまでの高圧的な態度からは信じられないくらいあっさりと、先生はあたしの膝から手をはなした。そして立ち上がると、医療器具とかをしまってる戸棚へ行って、なんかごちゃごちゃと取り出して。それをベッドの脇

へ置いた。太いゴムバンドとか木のへらみたいな道具。

「反抗的な生徒は、それなりに扱ってあげる」

先生は上体を起こしているあたしの肩を両手で前へ押し倒して……ええっ、なんてことするのよ！ あたしの首に馬乗りになった。

身体を起こせない。じたばたしてるあたしの手首がつかまれて背中にねじ上げられて。ゴムバンドで縛られてしまった。軟らかいくせに、どんなに力をいれてもほどけない。

馬乗りから解放されてあお向けにされて。先生、なにをやるんですか。誰か助けて——大声で叫べば、廊下まで聞こえていたかもしれない。でも、あたしは声を出せないくらい怯えていた。というのは嘘じゃないけど。処女膜の検査とか言って、先生はあたしにエッチなことをしようとしてるんだと気づいたから。レズに興味があったし。自縛オナニーとかしたことはあるけど(てへ)、こんなふうに自分ではほどけない後ろ手縛りは初めて。百メートル走のあとよりも心臓はドキドキ、息はハアハア。それでも、あたしは意地になって両足をぴったり閉じてた。

先生は膝の間に木のへら（これ、骨折のときに使う添木だ）を差し込んで、ぐいとこじた。梃子の原理ですごい力が加わって、あたしの足は簡単に開かれた。別の添木が膝の裏にあてがわれて、ゴムバンドで縛りつけられた。あたしは添木の長さ（四十センチくらい）だけ足を開いた形で――やだ、恥ずかし過ぎる。足を持ち上げられて、V字形に開いた股間に先生の頭がはいってきた。

くぱあと、大淫唇が先生の指で割り開かれて。

「あら、きれいな処女膜が残ってるわね」

うう……自分でも見たことのない部分を覗き込まれてる。だけじゃなくて。ずぷうっと指が侵入してきた。持久走のときに濡らしたのがまだ乾いてなくて、タンポンよりもあっ気なく侵入を許したんだけど。

「痛いっ……！」

ヴァギナの奥を引き裂かれるような痛み。唇をイーッと横に引っ張ったときの痛さを百倍したくらい。

「きれいだけど頑丈そうな処女膜ね。開口も小さいから、破瓜のときはつらいわよ」

からかわれて恥ずかしいのと、脅されて不安なのと。これからなにをされるんだろうという期待——は、あっさりとちょん切られた。

保健室のドアがいきなり開かれて。

「せんせえ……」

ベッドのまわりは半分ほどカーテンで遮られてたから、処女膜検査の現場は目撃されなかった。先生はあたしをあお向けに戻して(開脚縛りはそのまま)毛布で裸身を隠してくれて、カーテンも閉めきってから。

「なあに？ 開ける前にノックしなさいと言ってるでしょ」

「ごめんなさい。野原さんですけど……」

「都会育ちの子って、体格のわりに虚弱なのよ。慣れない環境で緊張してたせいもあるわね。今はぐっすり眠ってるから、そっとしておきましょう」

「お弁当、ここへ持って来ましょうか？」

「弁当だけじゃなくて、靴も制服も持ってきてくれる？ 体調によっては早退させるかもしれないから」

「はあい……」

ドアの閉まる音。でも、先生は戻って来て

くれない。あたしは全裸で後ろ手に縛られて開脚に固定されたまま放置。このあと、あたしなにをされるんだろうか？

十分もしないうちに、さっきの子があたしの荷物を運んできてくれて。それからやっと、先生がカーテンを開けてくれた。いきなり毛布を剥がして。

「や、やめ……くうん」

先生の中指がヴァギナに突き刺さって、入口の裏側をくねくねとこねられると同時に、輪ゴムで剥いたままになってるクリちゃんを親指の腹で撫でられた。かちこちに勃った乳首も反対の手でつままれて転がされて——根元の輪ゴムが食い込んでくるのも痛いより快感。

「あ、ああん……やめてください」

「あなたは、お昼ご飯どころじゃなさそうね。しばらく安静にしてなさい」

先生は立ち上がって毛布を元どおりにかけて、またカーテンを引いた。

中途半端に火を点けられて。だけど、手を縛られてるからオナニーもできない。せめて腿を擦り合わせてクリちゃんを刺激したいの

に、開脚で縛られてるから、それもできない。

カーテンの向こうでは。がそそと紙包みを開く音、サンドイッチかなにかを食べる音がしてる。これって、放置プレイ？ そんなことを考えてしまっ、ますます腰の奥が切なくなる。

ある意味、あたしは安心しきってた。こんなことをする先生が、ふんどしとかノーパンブルマとか輪ゴムとかを、保護者に通報する恐れだけは絶対はない。

十五分ほどして、またノック。

「どんな具合かな？」

体育の森先生の横柄な声。

「おぶったときの感触が気になってな。もしかすると……？」

「相変わらず鋭いのね」

声が近づいてきて。

シャアッとカーテンが開いて。智草先生は無雑作に毛布を引き剥がした。

「ひゃあっ……！」

本気で叫んで、あわてて口を閉じた。

「……おまえも、ずいぶんと手が早いな」

とっさに身体をねじって背を向けたけど、

添木で開脚させられた下半身はあお向けのまま。

「あら……剃毛とクリトリスは、この子が自分でしてたのよ。それと、乳首もね」

「ほう……」

見なくても、森先生の視線が股間に釘付けになっているのが肌に感じられる。内側から炎であぶられてるみたいに、股の奥が熱い。エッチなお汁が、チョコレート・ファウンテンみたくあふれてくる。

「見ているだけで、どんどん濡れてきたな」

背中に人の気配。

「ひゃうんっ……！」

予測はしてても、花びらを指でなぞられると声が出てしまう。

「●学生のうちからこんなだと、将来はとんだ痴女になるな」

「なにか問題を起こされたら、我が校の恥ですわ。正しい性教育が必要ですわね」

「それもそうだが——この年頃は性欲を持って余して、自分では抑えきれないものだ。知識も大切だが、まず性衝動を発散させてやる必要がある」

ぎくっと背中が震えたのが、自分でもわかった。まさか、ここであたしを犯す？

「性欲の発散にはスポーツがいちばんだ。どうせ、なにか部活をする決まりだしな」

「あ……ん」

花びらの上に置かれていた指がすうっと滑って、タイミングよく返事をしたみたいになっちゃった。

「おれが顧問をしているクラブに入れ。いやならテニス部かバスケット部を紹介してやるが、顧問の先生には、おまえの身だしなみとか輪ゴムとか、詳しく説明することになるぞ」

そう言いながら、つるつるの恥丘を撫でたりクリちゃんの輪ゴムを引っ張ったりするんだから——これって、脅迫だ。

「……入部します。だから、ほかの先生には言わないでください」

ばれるのは覚悟してたけど。こんなふうに脅されると、拒否できない。

「そうね。ふんどし愛好家の野原さんには、ぴったりの部活ね」

なんとなく、いやな予感（は、ずっとしてるんだけど）。

「あの……なんのクラブなんですか？」

それも知らずに入部するって、あたしもパニクリ過ぎてる。

森先生が、にたあつと嗤った。

「相撲部だ。おまえが、女子部員第一号だ」

相撲！ ふんどし一本の裸で……あ、でも。

「女子はレオタードとか下に着るんですよね？」

男子の前でおっぱいもお尻も丸出しなんて、いくらなんでも羞恥の限界を超えている。

「男女差別はいけないことだと、前の学校では教わらなかったのか？」

いやな予感は一閃に的中していた。

3. 部活デビュー

始業式から三日目は金曜日。運動部の活動は月水金だから、新学期の最初ということになる。相撲部は校庭の端っこのプールの、すぐ隣にあるプレハブ。レトロっぽい建物が並ぶ学校の中で、これだけが新しい。相撲部はモリトク（森篤夫先生のこと）が赴任してきてから作られて、そのときにプレハブが建てられたんだそうだ。

あたしの足取りは重い。だって、何人もの男子に『ほぼ全裸』を見られるんだよ。保健室の中で智草先生やモリトク先生に見られるのとはわけが違う。だから、のろのろ歩いて結び玉の刺激が小さいのに、いつもより濡れちゃってるんだけど。そうなんだ。性懲りもなく、今日も下着はふんどし。さすがに輪ゴムはやめてるけど。

校庭を突っ切る度胸がなくて、植え込みに隠れるみたいにしながら、とうとうプレハブ小屋に到着。ドアを開けると、モリトク先生を含めてふんどし姿が五人と、ジャージを着

た知らない小父さん。

「遅いぞ」

モリトク先生にうながされて、あたしはほかのみんなと向き合った。

「新入部員のふんどし娘——みんなも知っているだろうが、野原知子だ」

四人の男子が、くすぐったそうに笑った。

「マネージャーだから、どんどん雑用を言いつけてかまわんぞ。ただし……」

モリトク先生のつぎの言葉で、四人の顔に驚きが浮かんだ。

「相撲のことがわかっていなければ、マネージャーは務まらん。男子と同じ姿で男子と同じ練習をさせる。遠慮なく鍛えてやれ」

ん？　なんだか変な反応。三年の二人は、にやにやして目をぎらつかせてる。そうだよね。裸の女の子と組み合うなんて、ふつうはできないことだもん。わからないのが二年生のうちのひとり。あたしを睨みつけてる。女の子だったら、敵意と嫉妬の表情なんだけどな。なんて考えてるうちに。

「茂と悠人は、締め込みを手伝ってやれ。知子、裸になれ」

とんでもないことを、さらりと言われた。あたしもあたしで——もう覚悟はできてるから、指先はすこし震えたけど、さっさとセーラー服を脱いだ。その下はふんどしだけ。それもほどくと、ぐしょ濡れの股間に空気が触れて、性的な意味じゃないけど快感。男子四人と知らない小父さんの視線を感じて、あわてて手で隠した。

モリトク先生が赤い生地を津崎茂くんに渡した。みんな白い廻しをしてるのに、あたしだけ赤なんだ。紅一点てやつ？

「手をどけろよ」

あたしの前に立って津崎くん、声がかすれてる。エロ画像はともかく、リアル3Dを見るのはこれが初めてなんだろうな。

六尺ふんどしの倍以上も長い生地を二つ折りにして、おっかなびっくりって感じであたしの股間にあてがった。晒木綿と違って、ごわごわした感触。生地の手は、あたしのおっぱいのあたり。六尺ふんどしを締めるときよりも短い。股間をくぐらせた生地がさらに細く折りたたまれて、お尻を締め上げた。それをまた二つ折りに戻すと、あたしが自分で身

体を右へまわして、水平に引っ張られてる布を腰に巻きつけてく。余ってた端は折り返して、前に挟んで。最後にお尻に食い込んでる部分に下から絡ませて、腰を巻いた部分とまとめて結ぶ。

ふんどしの締め方とは違うし、この結び目、自分ではほどけないかも。

「知子以外は、いつもの練習だ。知子は蒲田さんに基本を教われ。PTA名誉会長さんだからな、失礼のないように気をつけろ」

蒲田さんて人、モリトク先生に似てる。どっちも筋肉質で、ジャージを着てるから腹筋が割れてるかまではわからないけど。二人とも角ばった顔つきだけど、ひと目で見分けがつくくらいには違うんだけど、いちばん似てるのは雰囲気かな？ おっかなそうだけど、あたしを見つめる目つきがいやらしい。

「相撲で大事なものは、身体の柔らかさだ。裸で土の上に叩きつけられることもある。怪我をしないためには、きちんと受身もできなければならない」

まず前屈をしてみろと、蒲田さんに言われて。あたしは楽々と手の平を地面に着けてみ

せた。

「ほう、柔らかいな」

ぺろんとお尻を撫でられて。

「きゃ……！」

身体を起こそうとしたら、背中を押さえつけられた。

「命じられた姿勢は、よしと言うまで崩してはいかん。わかったな？」

「……はあい」

やっぱり、そういうことだったんだと、あたしは納得してしまった。部活にかこつけて女の子の身体をさわりまくる（だけですむかなあ？）つもりなんだ。モリトク先生でなくて、この小父さんだったのは想定外だったけど。P T A名誉会長かあ。役得ってやつだね。

お尻をペチンと叩かれて、前屈は終わり。それからブリッジ。いくら廻しを着けてても、股を開いて腰を突き上げるのは恥ずかしい。結び玉はないけど、ごわごわした生地に股間全体を圧迫されて、これはこれで（性的な意味での）快感かな。

それから、基本練習が始まった。

最初は伸脚運動。片膝を曲げて片足を横に

伸ばすやつ。

つぎが、一部で有名な股割り。座った姿勢で両足をいっぱい開いて前傾。

「足は百八十度を開いて、胸が地面に着くまで」

なんて、無理だよ。そしたら会長さん、あたしと向かい合って座って。運動靴の裏であたしの内腿をぐいぐい押してくる。腿の筋肉がぴきぴき引きつれるまで開かされた。

「い、いたたた……もう、開けません」

「まだまだ。根性を出せ」

あたしの訴えは完全に無視される。百八十度はともかく、百五十度以上は開かされた。

前傾は、肩から地面まで三十センチくらい残ってる。足を閉じてたら自分の身体を二つ折りにできるんだけど、開脚してたら無理。そしたら、両手をそろえてつかまれて引っ張られた。今度は、背骨がめきめきと軋む。

「無理です……苦しい」

「痛いのは最初だけだ。じきに気持ち良くなる」

ん？ ニュアンスが微妙に違くない？

最初だからと、股割りは五分くらいで許し

てもらえた。

それから四股。肥ったお相撲さんが軽々と足を上げてるけど、いざやってみると爪先が膝の高さまでも上がらない。頂点で一瞬静止して、ドシンと踏み下ろせと言われても。意識して動きを止めようとするとう倒れそうになる。力を入れて足を落としても、ペチンがいいところ。できるだけ足を高く、できるだけ力を入れて——言われたとおりにフォームをなおしながらやっていると、二十回で息があがってしまった。全身が汗で濡れてる。

休ませてもらえずに、はあはあ言いながら摺り足の稽古。腰を落として、足の裏を地面に着けたままで前へ進む。これをしっかり身につければ、自分より重い相手でも押し出せるそうだけど。そういう展開にはならないという予感がしてる。

十分ほどでつぎのメニュー。これが休憩の代わりだったのかな。

つぎは、廻しをしてなければ柔道かと思っちゃう、転がり。自分から地面に転がる受身なんだけど、手は使わない。肩から落ちて身体全体で衝撃を吸収する。二回三回と転がっ

てるうちに、汗に濡れた全身に土がこびり着く。相撲小屋がプールの隣にあるわけがわかった。シャワーで流さないと、服を着れない。なんだか興奮してきちゃった。あたし、ウェット&メッシー（汚れフェチ）じゃないはずなんだけどなあ。

基本練習をさせられてるうちに下校時刻のチャイムも鳴って。薄暗くなってきたので蛍光灯が点けられて。部活は午後七時まで続けられるのだけど。男子はぶつかり稽古をすませたらしく、あたしを取り巻いて見物してる。

注目を浴びながら、仕切りの仕方を教わる。いくらBカップでも、上体を倒すとそれなりにおっぱいが揺れる。今日は輪ゴムをしてないけど、乳首が勃つのは止められない。男子の視線を意識するのはもちろんだけど、女の子のくせに廻しひとつで相撲の稽古をしてるという、そのシチュエーションだけで興奮しちゃってる。

そして、本日のクライマックス。

「仕切もなんとか形になったな。それじゃ、先輩部員に稽古をつけてもらえ」

「いや、その前に先生が手本を見せてやろう」

モリトク先生が土俵に上がって、あたしを手招きした。

しょうことなしに、あたしも土俵に上がった。教わったばかりの仕切りの姿勢を取って。考えてみたら、これってエッチなポーズだね。地面に手を突いてお尻を突き出して。

「よし、来い！」

と言われても。がっぷり四つとか右上手とか聞いたことはあるけど、どういうふうにするのか知らない。

「どうした。力いっぱいぶつかって来い」

も、やけくそ。中腰になって、モリトクの胸を目がけて突進。右に上体をひねって、肩からぶつかった——はずなんだけど。脛に衝撃があって、背中を上から押されて。べちゃっと土俵に叩きつけられた。じいんと、身体の前側全体に鈍い痛みが広がった。

「やりなおし。顔を上げて、頭からぶつかれ」
だって、こんなに痛いのに。

「きゃあっ……！？」

バシんと、お尻に鋭い痛み。反射的に転がって上体を起こすと、会長さんが竹刀を握ってるのが見えた。昭和テイストのスポ魂漫画

だよ。あ、女の子が相撲って時点でスポ魂から逸脱してるかな。

会長さんが竹刀を振りかぶるのが見えて。あたしは、あわてて立ち上がった。

仕切りからやりなおして。教わったとおりに頭からぶつかっていった。ドンッと。おでこに軟らかくて硬いショック。胸の分厚い筋肉と、その下の肋骨かな。ちょっと痛いけど、男の人にぶつかってくのって、案外と気持ちいい。なんて思っていると、廻しをつかんで引き寄せられて、身体を起こされた。必然的に胸と胸——正確には、モリトク先生の胸の筋肉とあたしのおっぱいとが密着して。むにゅっと、おっぱいがつぶれる。

「やん……」

変な声を出しちゃった。

ふっと、耳元で鼻息。嗤ったのかな。ぐりぐりと廻しを上下に揺すられて、おっぱいが下上に揺すぶられる。乱暴に愛撫されてるみたい。すくなくとも、痴漢されたときよりは感じちゃう。

パシン。また竹刀でお尻を叩かれた。

「踏ん張れ。土俵際だぞ」

おっぱいをぐりぐりされながら押されてたんだ。ええと……腰を落とすんだっけ。で、足の裏を地面につけたまま前へ運ぶ。あれ？モリトク先生、ずるずると下がってく。

土俵の中央まで押し返すと、モリトク先生が廻しをはなして身体を引いた。

「きゃんっ……！」

突っ張り。もろにおっぱいを両手で代わり番こに叩かれた。あたし、とっさに両手で胸をかばった。でもしゃがみ込んだりしなかったんだから、けっこうお相撲モードになる。なのに。手首をつかんで引き剥がされちゃった。

「張り手をかいくぐって突っ込んで来い。脂肪の塊がクッションになるから、男子よりもダメージは小さいはずだぞ」

無茶苦茶。おっぱいは女の急所なんだよ。どうせ、あたしを騷る（一対一だから『娯る』かな？）のが目的なんだから、言葉責めってやつだ。

あたしまズっ気はあるけど痛いのはいやだ——と思ってたんだけど。そうでもなかったみたい。

「うわあああっ……」

先生の張り手を両手で（三発に一発くらいは）払いのけながら、突っ込んでいった。ぼてん、てくらいへなちょこにぶちかまして。自分からおっぱいを胸に押しつけて、とにかく先生の廻しをつかんだ。

そしたら。廻しがお尻に食い込むのを感じたと同時に、あたしの身体がふわっと宙に浮いた。そのまま土俵際まで運ばれて。吊り出されて終わりだと安心したのに。いきなりまわりの景色が斜めに傾いた。

「きゃあっ……！」

おもいきり地面に叩きつけられた。転がりをしようにも、最後まで廻しをつかまれてたから、尾底骨から脳天まで衝撃が突き抜けた。

「今の要領で可愛がってやれ。乳揉み出し、ケツ押し出し、なんでもありだ」

それって、痴漢をけしかけてる。

あたしは会長さんに腕をつかんで立たされて、竹刀で土俵へ追い上げられた。

土俵で待っていたのは、三年の下河内悠人くん。相撲なんかよりソフトテニスのほうが似合ってる。そういえば。部員の四人とも、

どちらかというとなリムなタイプ。つけ加えると、わりかしイケメン。

その貴公子でイケメンな下河内くんと仕切って。

「……！」

痴漢行為も覚悟（期待？）して、不意打ちに突っかけた。だけど、二年以上も相撲をしてるだけあって。下河内くんは同時に立って、あたしにぶつかってきた。あたしは簡単にはじき返されて尻餅をついた。

「こらあ。それでは稽古にならんだろうが。受け止めて、じっくり可愛がってやれ」

ということで、仕切りなおし。今度は組み合った。でも下河内くんは先生みたく両手で廻しをつかまない。半身ていうのかな。あたしのおっぱいを片手で掬うようにして、もにゅもにゅと押し上げてくる。あたしは、へにゃっと力が抜けて。ずるずると押し出されかけた。

「投げろ！」

モリトク先生の声と同時に、また景色が傾いて地面に叩きつけられた。下河内くんは途中で廻しをはなしてくれたので、あたしはこ

ろんと転がって受身を取れた。けど、ものすごく痛いからすごく痛いかの違いくらいしかなかった。

休む間もなく、つぎは津崎茂くん。今度は最初から互いに廻しをつかんで。くそ、思いきし余裕なんだね。左手でお尻を撫でまわしてる。モリトク先生、こういうのは叱らない。最後は引き落としてって技？ お尻を撫でられてるのは無視して力いっぱい押してたのに、ふっと圧力がなくなって。

「あわわ……」

べちゃっと土俵に這いつくばった。痛い。中途半端に手をついたので、手首を捻挫したかな。でも、身体から落ちるってことは、女の子の場合、おっぱいからぶつかるってことだよ。モリトク先生がなんと言おうと、おっぱいはクッションじゃない！

「つぎ、二年生。太志、おまえからだ」

へえ、水無川くんで、ほんとはそういう名前だったんだ。ほかの三人はホソシって呼んでるから、いかにも似合ってるなと思ってたけど。この子（学年が下だから、『子』でいいよね）、華奢なだけじゃない。女顔っていうの

かな。輪郭の線が柔らかくて、ちっこい唇とぱっちりした目。髪の毛も、あたしより長くて。スッピンでもスカートを穿けば、女の子に見間違えるかも。

で、立ち合いは。太志くんのほうから突っ込んできた。思わず横へ逃げたら、太志くんはつんのめっちゃって。チャンス。

「ええい！」

送り出してやつ。かんたんに押し出せた。

「馬鹿もん！」

モリトク先生、太志くんのおなかに竹刀を突き入れた。おなかをかかえてうずくまった太志くんの肩を乱れ打ち。

「初心者の女に負けるとは、何事だ。心も技もなっとらん。今日は居残り特訓だ」

「はい、お願いします」

そう答えたときの太志くん、微妙な表情だった。どう微妙かということ——怯えてるのが丸わかりで、すごく嫌そうなんだけど、頬がぽっと赤らんでる。なぜかあたしを見上げて、恨むどころか、どや顔。

最後に二年の高橋駿介くんとの取組。上級生への遠慮かな。それとも女の子へのいたわ

り？ 胸とおっぱいとを強引に合わせようとはせず、あたしがおでこを胸につけて押すのを許してくれた。押すといっても、あたしがずるずると押されたわけだけど。土俵際で投げられたときも、ふんわりって感じ。ちっとも痛くなかった。

稽古のあとは五人でお掃除。その前に会長さんは帰っていて。

お掃除が終わると太志くんとあたし以外の三人はシャワーで身体を洗いに行った。

あたしと太志くんは、廻しを着けたまま座禅を組まされた。心技体の『心』の鍛錬だというけど、太腿の上に足の甲を乗せる結跏趺坐というやつ。そりゃ、女の子だってパンツルックのときは平気で胡坐座りするけど。それよりもずっと大きく脚を開くし、ごわごわした生地が股間を圧迫して、そこを意識しちゃうから、ミニスカートで胡坐になるより恥ずかしいくらい。

無念無想の境地——になんか、なれない。女の子に負けた罰（？）で特訓を受ける太志くんはともかく、なんであたしまで残されるんだろ。あたしも特訓なのかな。ていうか、

特訓で、なにするんだろ。

なんて考えてるところへ、三人が戻って来た。何気なく目を開けて、そっちを見ると——うわ、三人ともフルチン。いちおうは脱いだ廻しとかタオルで隠してるけど、ガードが甘い。パパのアカウントでPCにログインしたり(閲覧履歴を消すくらいの悪知恵はある)学校のPCでプロテクトをはずしたりで、エロ画像はさんざ見てるけど、生●ンポ(はしたない。リアル3Dペニスって言いなおす)を見たのは、これがは初めて。フランクフルトとかいうけど、うん、これは皮付きウインナーだね。

で、ウインナーがブリーフやトランクスを穿いて、学生服に着替えて。

「お先に失礼しまーす」

モリトク先生、ドアの鍵を掛けて窓のカーテンを引いた。かなり怪しいオーラが部屋に満ちてきた。

「知子は見学している。いずれ、おまえにも特訓を受けさせてやる」

モリトク先生が土俵にあがった。

「太志、来い」

太志くん、自分の足首をつかんで結跣蹴坐をといて。引きつった表情で土俵へ。中腰に構えている先生に、きちんと仕切ってからぶつかっていった。先生は胸で受け止めて、びくともしない。太志くんは基本どおりに腰を落として、細い腿がぷるぷる震えるくらい力をいれて押してるのだけど、一ミリも前へ出られない。

「そらよっ」

モリトク先生に足を蹴飛ばされて。うわ、首根っ子をつかんで土俵へ叩きつけられた。

さすがに太志くんは男の子。痛いとか泣き言を言わず、すぐに立ち上がった。そしてぶつかって行って、今度はあたしのときと同じ。最後まで廻しをつかまれたまま、土俵の外へ投げつけられた。

その二回で、太志くんは全身砂まみれ。擦り傷にならないんだろうか。そういえば、あたしの肌、あちこちピリピリしてる。あらためて腕とか眺めると、ところどころ血がにじんでた。今まで気がつかなかったのは、アドレナリンのせいかな。

太志君は、三回四回五回とぶつかっていっ

ては、うつ伏せに叩きつけられてあお向けに投げつけられて。

「へっぴり腰でふらふらして、おまえはそれでも男か」

なんか、時代錯誤な発言だな。

「はい、男です」

「証拠を見せてみろ」

「はいっ」

太志くん、廻しをほどいちゃった。手際の良さといい、科白の応酬といい、すごく手慣れた印象。

太志君は『気をつけ』の姿勢で、前を隠そうとしない。毛は、まだ生えてない。なのに、皮の先から具がはみ出てる。そして、ほとんど垂直に勃起してる。

モリトク先生が、その勃起してる先っぽを竹刀でつついた。

「ふん……見かけは、たしかに男だな」

言いながら。ぐりぐりとえぐった。とうぜん、オ●ンチンは横へ逃げる。それを追いかけて根元から下向きにねじ曲げてみたり、跳ね返ったところを軽く叩いたり。

「せ、先生……ぼく、もう……」

腰をよじった瞬間、オ●ンチンから白い液体がぴゅぴゅっと飛び出た。エロ動画で見たより、ずっと激しい勢い。

「おまえは、また……神聖な土俵を穢すなど、何度言えば覚えるんだ？」

怒っているけど演技だと、あたしでも見抜ける。ふうん、そうかあ。モリトク先生と太志くん、そういう関係だったんだ。

精液の飛び散った砂を太志くんが手でかき集めて、ゴミ箱へ捨てて。元の位置、あたしの隣に座った。今度は結跏趺坐じゃなくて正座。しょげ返ったオ●ンチンは股の間に挟んでる。

「土俵を穢した罰だ。口を開けろ」

モリトク先生まで廻しをほどいて。うわあ、さすがにオトナ。ずる剥けで太くてごつごつしてて、サラミソーセージだ。松茸かな。それを太志くんの口元に突きつけた。

それまではあたしの存在を無視してた太志くん、やっぱり恥ずかしいのか、あたしをちらっと横目で見て——だから、どうして、そこでどや顔するのよ？

太志くん、ぱくっとサラミソーセージを咥

えた。そして、両手は腿の上に置いたままで、上体を前後に揺すってピストン運動。脳震盪を起こすんじゃないかってくらい激しい。

と、想定外の急展開に驚きっぱなしのあたしだけど。モリトク先生、あたしにも特訓を受けさせるって言ってなかった？ てことは、あたしもフェラチオさせられるの？ モリトク先生って、(シヨタコン+ロリコン)×S??

校長先生とかに訴えても、たぶん握りつぶされるんだろうな。PTA名誉会長の小父さんがバックについてるみたいだし。パパとママに話しても信じてもらえるだろうか。というよりも。あたしは、ほんとに特訓を受けたくないんだろうか。

もちろんだよ！ これって、性的虐待だよ。だけど、あたしは気の弱い女の子だから。部活に出ろって言われたら逆らう勇氣はないし、エッチな特訓を強制されたら——うん、そう。強制されたら、だよ。竹刀で叩かれるのが怖くて、言いなりになっちゃうような気がする。

「出すぞ……」

モリトク先生の切迫した声で、あたしは妄想（ではなくて、迫りつつある現実の危機だと思う）から醒めた。

「すっかり遅くなったな。帰り支度をしろ」

モリトク先生に引率される形で、プールのシャワー室。どうせそうだろうと予測はしてたけど、男子更衣室の鍵しかないので、あたしも二人と一緒にシャワー。廻しに着替えるときに全裸を見られてるし、今は三人だけだし薄暗いし、そんなに恥ずかしくなかった。それよりも、あたしはお邪魔虫なんじゃないかって、変に気を使っちゃった。

夜道は危ないからって、あたしも太志くんも先生の自動車で家まで送ってもらった。気をきかせて、あたしはさっさと後ろのシートへ。助手席には、とうぜんのように太志くん。

「相撲部のマネージャーをしてもらうことになりましたね」

いけしゃあしゃあと、お爺ちゃんに説明するモリトク先生。

「跡片付けをしてもらってるうちに遅くなりました」

「かえって先生の仕事を増やしてしまいました

たな。これからは、連絡をいただければ迎えに行きますので」

「いえ、部活をさせるからには、無事に帰宅させるまでが教師の仕事です」

相撲部ってところには、お爺ちゃんは何んの疑問も持ってないみたい。まあ、野球部とかでも女子マネがあたりまえみたいなものだしね。一緒に練習するあたしは、プレイング・マネージャー（違。

とにかく。ふんどしで通学して、部活もふんどし。しかも。輪ゴムで自虐してるのにつけこんで緊縛レズを仕掛けてくる保健室の先生に、女の子を相撲部に強制加入させたりショタを馴致(バラとかユウウツは書けなくても、この漢字は書ける)してる体育の先生。ここにあたしが転校できたのは、天の配剤てやつだね。

転校四日目は土曜日で、お休み。お爺ちゃんとお婆ちゃんは四時起き。山へ芝刈りにも川へ洗濯にも行かないで、畑仕事。あたしも手伝いますって申し出たんだけど、こっちへ来て成績が下がったんじゃパパとママに顔が

立たないとかで、せめて朝食の準備と洗濯を引き受けたんだけど。いくら田舎でも薪でご飯を炊いたりはしないし、洗濯だって全自動。それに、あたしの洗い物が極端に少ないしね。

というわけで、お昼前には暇を持て余して——いたところへ、パパとママのサプライズ訪問。片道四時間もかけてだよ。

パパとママは。学校で性的なイジメに遭って心が傷ついた（ことになってる）ひとり娘に、どう接していいか戸惑ってる。

親元からはなれるからってスマホを持たすと、かえってそっちが危ないくらいに考えてるらしいし。ADSLもつながらないんじゃ、あたしのノートPCも宝の持ち腐れ。最初の晩に固定電話で通話しただけで音沙汰なし。と思ってたら、これだもん。

「うーん。まだ三日だけだから、友達ってほどの子はいないけど。意地悪とかはされてないよ。授業は、ちょっと小学校みたい。あ、レベルが低いって意味じゃなくて。体育と技術家庭科は森先生が掛け持ちで、数学と理科は佐々木先生。前の学校みたく教科ごとに先生が変わらないから、アットホームぽい雰囲気

気かな」

やましいときはよくしゃべるって、ほんただ。だけど、パパとママは、あたしがすっかり明るくなったって喜んでた。

夕方に帰るまで、あたしは部活については何も話さなかった。前の学校では読書部という名前の帰宅組だったから、今度もそうだろうと思ってくれたかも。

日曜日は、昼過ぎから散歩に出た。モリトク先生の言葉を借りれば、性衝動は部活で発散されちゃったから、輪ゴムもふんどしもやめて。ごくふつうにショーツを穿いて、ブラもきちんと着けて。GジャンとGパンのボーイッシュで。

田舎というと田んぼってイメージだけど、この村は違う。山と山に挟まれた細長い平地に、どかんと道路がとおってて、そのまわりにぽつぽつと家がある。畑はあるけど、家庭菜園の拡大バージョンでとこ。じゃあ、米は作ってないのかというと、実はたくさん（でもないか）作ってる。山の斜面を切り開いた、段々畑。じゃなくて、段々田んぼ。棚田っていうんだね。機械を入れられないから、農作

業は人力。田植えと稲刈りは村中総出で、春はゴールデンウィークとかぶるし、秋は学校が休みになる。そのぶん夏休みを削られるんだから、迷惑もいいとこ。

道路は二車線でアスファルト舗装されてるけど、交通量は少ない。あたしは気ままに、道路のこっちを歩いたり向こう側へ行ってみたり。畑によって作物がいろいろ違うし、家も木造あばら家とか庄屋さんのお屋敷みたいのとか、いろいろ。どれもこれも前世紀に建てられたらしいという点では一致してる。

三十分ばかり歩いて、そこがいちおう村落の端っこ。そこから先は両側が切り立った山肌になってる。その斜面を堰き止めるみたいな位置に、わりと新しいポスト（ええい、それは忘れろ、あたし）モダンな家があった。コンクリートの三階建て。庭が畑じゃなくて、広い花壇と芝生になってる。その花壇を手入れしている女の人に気づいて、あたしは思わず足を止めてしまった。

小麦色の肌にまっ赤なビキニの水着（だよね？）という、季節はずれ。髪も茶色だし、外人さんかな。て、しげしげと見つめてると。

向こうも、あたしに気づいて振り返った。けど、挨拶もなしで背を向けた。道行く人ごとに挨拶する習慣が定着しかけてるあたしとしては、ちょっと不愉快になりかけて。もろTバックのお尻に将棋盤みたいな模様が浮かんでるのに気づいた。これって、鞭打ちかなんかの痣？

あらためて観察すると。背中にも斜めに何本も筋が刻まれてるし、太腿と二の腕には縄で縛られた痕が残ってる。てことは——SMプレイで露出プレイ？

「野原さんとこのお嬢ちゃんだったね」

不意に声をかけられて、飛びあがりかけた。「他人のプライバシーに興味を持たないほうがいいよ」

あたしが覗き見をしてたみたいな言い方。この小父さんは、ええと、昨日も挨拶したんだけど、誰だっけ？

「あの……畑ばかりの家で、ここだけお洒落だなんて」

「蒲田さんは農家じゃないからね。庭を造ったりビルを建てたりが仕事だから」

「じゃ、この家も手作りなんですか？」

「はは、おもしろいことを言うお譲ちゃんだ。しかし……自分の会社に建てさせたんだから、手作りと言えなくもないか」

会社の社長＝偉い人。名字も同じだし。小父さんにたずねたら、やっぱりこの蒲田さんがPTA名誉会長さんだった。

「教育にもかかわってるお人が、わざわざ後妻にフィリピン女性を選ばなくても……いや、今のは聞かなかったことにしてくれるね？」

ふうん。妄想がもくもくと湧いてくる。貧乏な家族を助けるために身売りして、異国の地で妻とは名ばかりの性奴隷にされて、SM調教されている女性……なんてね。そうでなきゃ、あたし以上のエロ娘かな。娘って年頃だと思う。もしかすると十代かも。●ドルティーン VS ハイティーン、ふんどし VS Tバックビキニ。ボンキュッボンでは、あたしの惨敗。

そんなことを考えてると、性衝動てのが戻ってきて。

月曜は、輪ゴムと結び玉ふんどしの完全装備。まあ、護身対策なんて言っちゃったから、ふんどしをやめるわけにはいかないんだけど。

あと、念のためにタンポンも挿れといた。日数からも、おっぱいの張った感じとか腰のあたりのもやもや感からも、生理が近いのはわかってたから。

昼休みにチェックしたら、やっぱりビンゴ。さいわい、本日は部活が休み。体育館にビニールシートを敷いてパイプ椅子を並べて。入学式の予行演習。

火曜日が本番。二十二名の新一年生が加わって、生徒数がふつうのひとクラス分を超えた。入学式のあとは、部活の紹介。文科系は美術部（帰宅部）とボード部（オセロと五目並べとモノポリー）とパソコン部（ゲーセン）。体育系がテニス部とバスケット部と相撲部。定番の軟式野球やサッカーは、紅白試合もできないから無し。

体育系はユニフォーム姿で壇上に上がる。相撲部のときは、ちょっとざわついた。ちょっと言ったのは、あたしはジャージの上下だったから。あたしまで廻し姿だったら大騒ぎだったろうな。

水曜日の部活は生理だから休みたいって申告したら。

「なんのために、おまえだけ赤い廻しにしてやったと思う？ 生理は病気じゃない。サボリは許さん」

というわけで。股間から垂れた紐を見られながら、廻しを着けなければならなかった。輪ゴムは、部室へ行く前にはずしといたけど。

今日からは、男子部員と同じメニュー。そして、P T A会長さんの役割はモリトク先生。エッチなことをされるのを覚悟してたけど。すごくまじめな稽古だった。というのも、見学者多数のため。

新一年生が部活を見てまわるのに便乗して、二年生や三年生も(男子ばかり)見学に来た。エッチなことをされてなくても、女の子が廻しだけの裸で相撲を取るんだから、一か月分のオカズになるよね。

見物は多かったけど、入部希望者はゼロ。女の子の裸目当てで入部したと思われるのが恥ずかしいのかなと勘ぐったけど、実は毎年のことだそう。あれ？ それじゃ今の四人はみんな途中入部？

金曜日は生理も終わってて。見学者もいなくなってる。というのも、校舎からいちばん

遠い部室まで、運動場を突っ切るにしても、ぐるっと回るにしても。面倒だし目立ってしまう。同性の裸になんか興味はないだろうし、異性の裸には興味があっても本人がからかわれるネタにされる。

というわけで。治外法権的な部室の中で。あたしは、たっぷり可愛がられた。

「もっと股を開け」

モリトク先生は背中におおいかぶさって腿の付け根をぐりぐりしたり。

「まだ、胸がこんなに地面からはなれてるぞ」

胸と地面との間に手を突っ込んでおっぱいを揉んだり乳首をつまんで引っ張ったり。身体じゅうを弄ばれた。

ちっとも快感なんかないのに。男子に見られながら乱暴に扱われてるってシチュエーションだけで、生理直後の不快感とは違う疼きが腰の奥から湧いてきた。

男子は同学年同士で組んでるんだけど。太志くんの視線が肌に突き刺さってくる。彼には、あたしたちがいちゃついているように見えるのかも。

総当りのぶつかり稽古は同じ相手とは三回

ずつで、あたしは十二連敗。なぜか、あたし
のときだけ勝負が長引いた。そして、寄り切
りとか押し出しの負けはひとつも無し。砂ま
みれのおっぱいを揉まれるのって、すごく痛
くて不快だけど、腰が砕けそうになっちゃう。

ぼろ負けでも、居残り特訓は命じられなか
った。

五人で土俵を掃除してるあいだに、モリト
ク先生は先に身体を洗って。

「ちゃんと鍵を掛けとけよ」

校舎の隣にある用務員室へ帰った。モリト
ク先生は（体育教師で力があるし、技術家庭
科を教えるくらいに器用だからかな）用務員
の役目も引き受けてて、そのかわりに家賃無
料で用務員室に住み着いてる。

もう、モリトク先生にけしかけられなくて
も、あたしの扱い方をみんな心得てる。だか
らあたしは、五人一緒にシャワーを使わなく
てはならなかった。太志くん以外の三人はと
ても親切で、寄ってたかって、あたしの身体
に着いた砂をていねいに（素手で）拭き取っ
てくれた。

五人一緒に山道を下りて、そこからはばら

ばら。相撲部員に同じ村の生徒はいないので、あたしは何度も投げつけられた身体の痛みと、揉みくちやにされた肌の火照りと、ふんどしの結び玉の刺激とを一緒くたに持て余しながら、とぼとぼと家路についた。

結び玉のことは、シャワーの後で部員にばれちゃった。

「こうしとかないと、すぐによじれて奥まで食い込んでしまうの」

それが口実だくらいは、みんな見抜いてる。冷や汗まじりのあたしの説明を、にやにやしながら聞いてた。

ばれるというのとは違うけど。あたしが相撲部に入ったことも、入学式のクラブ紹介で全校に知れ渡った。

「ほんとうにふんどしが好きなんだね」

って、呆れてくれるような親しい子もいない。同級の女の子七人は、誰も近寄ってこない。今のところは、わざと無視するイジメではなくて。あの子と話をしたら、自分も同類に思われる――みたいな？

でも、クラスで孤立してるかということ、そうじゃない。

「今日もふんどしをしてるの？」

休み時間には、男子が好奇心丸出しで話しかけてくる。

「そうだよ。ほら……」

女子に無視されてる反発で、あたしは短めのスカートの裾を持ち上げて、ちらっとふんどしを見せつける。

ここまで大胆に振る舞うと、かえって引かれちゃう。

「……うん」

とか口ごもって、男子は逃げてく。けど、つぎの休み時間にはほかの男子が同じことを聞いてきて。そんなことを繰り返すうちに、女子の目つきがだんだん険しくなってくるのは気づいてる。そのうち、前の学校みたいな事件が、また起きるかな。今度はどの先生も助けてくれないような気がする。